

森林休養の日本の特質(1)

中 村 貞 一^{*}

Sadaiti NAKAMURA

Some Japanese Characteristics of Forest Recreation (1)

目 次

1. はじめに
2. 中世以前にみられる日本の特質
(以下次号)
3. 近世にみられる日本の特質
4. 現代日本の森林休養の変貌
5. まとめ

1. はじめに

現在 forest recreation ¹⁾ がもっとも盛んな U.S.A. で森林休養として行なわれている形態は、森林地帯の自動車ドライブ、林内キャンピング (trailer 宿泊も含む)、歩行・自転車・馬・カヌーによる林地旅行、林地でのピクニック (食事、遊戯、休息)、狩猟、魚釣り、山の幸ひろい (nuts, berries, mushrooms, grapes, persimmons etc)、スキー、集団キャンプ (organization camps)——児童・青年・労働者などに軽費用で夏期休暇の機会を与える目的の慈善事業——などである。^{2) 3)}

Outdoor recreation が U.S.A. で爆発的に広がったについては、自動車の急速な普及が理由としてよくあげられるが、より根源的には、MEAD ⁴⁾ によると、U.S.A. の市民構成の特殊性があげられ、pioneer につづいて、開拓時代の末期にこの国に移住したヨーロッパ農民と労働者の多数が、独立農業経営者になることもできず、非技能的労働者になり了って、自分の土地をもたず、密集住宅に住むことを余儀なくされ、スラムを形成したときに、今日の戸外休養ブームの火種はつけられたとされる。

recreation を Webster 辞典 ⁵⁾ のように、「はげしい労働ののちの体力と精神の疲労の回復の手段」(refreshment of the strength and spirits after toil) と解し、現代の都市生活と労働の機械化・単能化の重圧に対抗する緩和剤と規定するならば、日本の森林休養はそのスタ

ートはやっと30~40年を遡るにすぎず、名所見物、遠足遊山 (わらび狩、花見、もみじ狩、栗ひろい、松たけ狩など)、溪流釣魚、キャンプ、ハイキング、登山、スキーなどがあげられることになるが、recreation をやや拡張して、Columbia Encyclopaedia ⁶⁾ のように、「弛緩・娯楽あるいは自己表現を通じてえられる満足感を旨として、自発的に従事する行動」(Any activity engaged in voluntarily for the satisfaction it brings, whether through relaxation, fun, or the opportunity for self-expression) と解するならば、日本の森林休養も古くさかのぼることができ、万葉時代の狩猟、釣、梅見、花見、紅葉狩などがすでにこれに入ると考えられ、江戸時代に庶民にまでよく行きわたった神仏詣、遊山などが入る。

これらの日本でおこなわれている森林休養を、すこし立ち入って考察すると、休養形態には日本独自のパターンがあると思われるし、また森林休養が戸外休養全体の中にしめるウエイトにおいても、日本的なある傾向がつかまえられると考えるので、つぎにその点をとりあげてみよう。

2. 中世以前にみられる日本の特質

日本の風景の象徴である日本三景は、古くは 天の橋立・厳島・松島であり、また富士・宮島・日光である。そこには海と山と神社と松はあっても、森林は、すくなくとも、意識の前面には出ていなかった。箱根・日本アルプス・富士の裾野などが観光地と考えられるようになったのは、明治以後であり、中世から熊野権現、高野山、立山、白山、富士山、男体山、大峰山、石鎚山、月山、御嶽山などが霊場として参詣されたが、これは信仰修験の場としてであって、上代中世にはまだ一般的休養地とはいえなかったし、また当時の修行の中に自然観照の余地がどれだけありえたかには疑問がある。

森林に対する国民の関心の深さは、まず文学にあらわれてこなければならない。ヨーロッパ人の文学にあらわれる英雄は、ジークフリート、ロビンフッド、ウィルヘ

^{*} 育林学研究室

ルム・テルなどいづれも森林を背景にもっているし、小説でも——管見の範囲で手あたりしだいあげてみると——ドロステ・ヒュルスホフの「ユダヤ人のブナの木」⁸⁾や、ヘッセの「ナルチスとゴルトムント」第7章、ツルゲーネフの「獵人日記」中の「ピリューク」「森と草原」「クラシーヴァ・メーチのカシヤン」、アメリカではソーロの「森の中の生活」などは森林文学⁹⁾といってよいものであろうし、ハーディの「森林地の人々」、シェクスピアの「お気に召すまま」、夏の夜の夢」など森林を舞台とする作品がいくつも浮んでくる。

日本には、森林に限らず一般に自然について、古来それを客観的に観照し、克明に描写する文学は少いのであるが、とりわけ森林に関しては、歌・小説・劇でこれを舞台とし、森林を生き生きと描写する森林文学といえるほどのものは、江戸時代以前にはまず見当たらない。

お伽話にしても、ヨーロッパには、「ヘンゼルとグレーテル」「三匹の熊」「ブレーメンの音楽師」「ビンの中のおばけ」「森の家」「ふしぎの国のアリス」……と、森林を舞台とする話はずいぶん思い浮び、お伽話と森は切りはなせないが、これに対して日本のお伽話には森林との結びつきが薄く、「山梨もぎ」「こぶとりじいさん」のような森を舞台とする話はまったく珍らしい。

日本には「樹木の文学」¹²⁾はあるかもしれないが、「森林文学」¹³⁾はつい近世まで育たなかった。

日本においても、ごく最近ではアメリカ、ヨーロッパと同じ方向をとって、近代産業的背景をもった戸外休養形態が段々あらわれつつあるが、それについてはのちに触れることにして、前代の日本の戸外休養の特質を吟味することが、現代のその特質を明らかにするうえに役立つと考えるので、少し遡って考える。

森林休養として、上代から、おおぜいの勢子をつかい弓矢による狩猟が貴族の遊びとして行なわれていたことは、山部赤人の歌¹⁴⁾

あしびきの山にも野にも御獵人さつや手挟み^{みだ}散動りたり見ゆ¹⁵⁾
また旋頭歌に

垣越ゆる犬呼びこして鳥獵する君 青山としげき山辺に馬息め君

そのほかにも万葉集のあちこちに散見する歌¹⁶⁾から察せられ、獲物としては猪・鹿・鶉・雉、そのほか変わったものとしてむさびびが出てくるが、その行なわれた場所は「春の茂野」¹⁷⁾であり「獵路の小野」¹⁸⁾「山辺」¹⁹⁾であって、あまり深い山ではないようである。またその頃からすでに、鷹をつかってする鷹狩²¹⁾もさかんに行なわれたようであるが、その場所は、この狩猟の方法からみて、森より

は野に近い林である。

そのほか山間の溪流で、あゆ・やまめなどを釣ったことも充分想像される。ところが、生計のための釣りは散見するが、遊びとしての溪流釣りの例は——有名な神功皇后の話はあるが——万葉には見あたらない。意外に行なわれることが少なかったようである。

紅葉狩はかなり一般に広く行なわれた行事であった。²³⁾

つぎに、遊びとして深く山へ入ったと思われる歌に、筑波山に登らざりしを惜しむ歌一首 高橋虫麻呂。
筑波根に吾が行けりせば、ほととぎす山彦響め鳴かましやそれ²⁴⁾

があるが、これが約30首のほととぎすの歌にまじっているとところから考えると、この山登りの目的は、山よりもほととぎすを聞くためのものかと思われる。

筑波山には、このほかに、筑波嶺に登りて唄歌会をする日作れる歌とか、検税使大伴卿の筑波山に登れる時の歌のように、山よりも「かがひ」を目的に登っていると認められる歌がいくつかある。

ただつぎの2首、筑波山に登りて、丹比真人の作れる歌。²⁷⁾

鶉が鳴く東の国に 高山は多にあれども 二神の貴き山の 並み立ちの見か欲し山と 神代より 人の言いつぎ 国見する 筑波の山を……雪消する 山道すらを なつみぞ 吾が来し（反歌略）

筑波山に登る歌一首（高橋虫麻呂？）²⁸⁾

草枕旅の憂を 慰もる事もあらむと 筑波嶺に登りて見れば……………筑波嶺のよけくを見れば 長き日に 念ひ積み来し 憂は息みぬ（反歌略）

この2首はあるいは「かがひ」をもはなれて、山そのものを対象とした本格的休養として数少い例であるかもしれない。

このような森林や山を背景とする休養も、そのころの戸外休養を展望してみれば、むしろ野遊びの方がはるかに一般的で広く行なわれたのであって、そのことは、若葉つみ・梅見・桜狩 など野を背景とした遊びの歌が、山部赤人の春の野に壘つみにと来し吾ぞ 野をなつかしみ一夜宿にける 以下万葉集に枚挙にたえぬほど見出されることでもしられる。

また自然観照については、海辺、海上に関するものが、森林、山にくらべて、量的に圧倒的に多いことは、一々例をあげるにも及ばぬであろう。

ここにいま筆者は、1つの仮説をたてている。それは上代・中古の日本では、山や森林が遊びの対象となった

ことは、野や海辺にくらべてはるかに少かった。たとえ森林や山が遊びの場となるときでも、多くは狩、花見、ほととぎすなど、何かその一部分がクローズアップされて、それが遊びの対象となり、全体としての山と森林はその背後にかくれてしまうことが多かった。

森林に対する関心が、ゲルマン民族ほど大きくないということは、これは日本民族の起源が狩猟民族でなくて、農耕民族であったこともはたらいっているかもしれないが、もともと日本人には、山とか都市全体とか、そういった非常に大きいものを、そっくりそのままに、そこに内在する秩序を明確にさぐりあてて、全体の調和あるイメージをうけとる仕方には、巧みでなかった。日本人の自然観照は、とかく細部の観照に流れやすかった³⁰⁾——現在でも多分にそういう傾きがあるとおもうが——ことの、たまたまひとつの表れなのではないか。

遊楽として森林に入ることは、狩猟や紅葉狩などを通じて行なわれており、登山も稀ではなかったと考えられるにもかかわらず、それが文学に僅かしか取りあげられないところに、日本人の自然観照の仕方の特徴がよく反映していると思う。

その点を、もう少し詳しく述べる必要がある。日本人は自然を愛好する国民であり、自然の懐に深く抱かれて生活しているといわれる。にも拘らず自然の観照において、ヨーロッパ人ほどの精緻さをみせないというのは、どうしてであろうか。

ヨーロッパ的自然観察が、自然を客観的に精細に描写しつつ、しかも自然を内から支えている大きな秩序、自然を貫く精神ともいうべきものを適確につかまえることを忘れないにくらべて、日本のそれは直観的で、描写の肉付けにおいて淡泊である。そしてしばしば自然のうちの一部分である細部をとらえて、その細部のたたずまいとかすかな動きの中に、風景全体を表現し象徴させようとする傾が、たしかにみられる。秋といえば七草を描き、あるいはもみじに鹿をあしらうその発想がそれであり、大きなものをときに見失う精神構造は、過去の日本の代表的風景が多くは箱庭式風景であって、阿蘇山や伊豆半島、熊野灘ではなかったし、また現代でも、絵のように美しい住宅庭園を作りうる日本人が、メガポリス東京に都市計画の名に値する計画をついに立てえないでいるところなどに、端的に露呈しているといえよう。

日本人のこういう自然観なり、自然に対処する態度が、何に由来しているかを、さらに辿ることが、われわれの森林林養の日本の特質の解明にも、ある光を投げかけてくれるであろう。

日本人の精神構造を解く1つの鍵として、和辻哲郎が³¹⁾かつてとりあげた風土がこの場合役にたつ。モンスーン

気候帯に住み、自然の恵みと自然の脅威の双方が骨の髄までしみこんでいる日本人には、——現代はともかく——過ぎ去った時代の知恵では、自然の力を征服して、統御する野望など及びもつかぬところであって、自然の懐でもっぱら受動的に生活してきた。風土が自然に能動的に対立することを許し、自然を>征服すべき対象<として、早くから眺めてきたヨーロッパ人に必要であったのは、まず自然の客観的観察と記述であり、自然科学の積みあげであったが、自然に順応しつつ、その間隙をぬって、受動的に生きてきた日本人には、むしろ感情移入的自然感情が発達すると同時に、雨に恵まれて豊富な植物景観が³²⁾つきつぎに移り変ってゆく季節推移に、まず関心をひきつけられたのも当然であった。

日本人の自然に対面する姿勢は、風土によって、昔から気象変動に非常に敏感とならざるをえなかった結果、自然観照においても、自然の空間構成の捕捉よりは、関心は、時の流れにおいて、気象と季節のわずかな移り変りに感覚が鋭くときすまされる方向に修練が積みあげられた。そこで自然界の片隅におこるうつろいやすく、見逃されやすい季節の表情も、めざとく取りあげるのが、昔から今に至る日本人の自然に対する態度であった。

季節のたたずまいは、もちろん風景の全体にわたってくまなくあらわれるものであるが、日本人の眼には、むしろ身のまわりの現象、肌ふれる風の感触、花の芽、草の露、虫の音といった自然のはしほしに、まず季節をvividに感じとる。それはわざわざ遠く足をはこんで、探しに行くまでもなく、働く場の中にも手軽に、至る処でみつけだされるものである。それに心がとどまるのはほんの瞬間かもしれないが、それが働く人の快い気分転換となり、refreshmentの役目をする。

日本人のレクリエーションには、もともと風土的に、このような手軽な一面があるのであって、勤労の場とその補償としての休養の場とに区別するまでもなく、いかなる仕事の場に身をおいても、身近に身の周りからちよっとしたrefreshmentの種を見いだす術を知っている。そのような生活法をいつしか身につけてしまった。日本に短歌、俳句が大衆的に浸透しているのは、詩形が短いということもあるであろうが、日本人の自然観に上述のような傾きがなくては、到底これほど大衆に深く根を下すことはできなかったに違いない。

高度の都市化と近代産業発展を経過した今の日本には、自然環境からほとんど隔離されてしまった職場と、住環境が次第に拡がって、職場と住いの中で伝統的な自然観照を働かすことのできる余地は、次第に狭くなってきているが、一時代前まではまだまだ身近には、一日中自然環境とのつながりが断ちきれず、たとえ勤勞作業

中でも、身の周りの自然の断片にあらわれるささいな季節表現を通して、気分転換の一瞬をもつ機会にはこと欠かなかった。いわば常住坐臥、眼をすこし仕事から外らせることによって、手軽なレクリエーションのきっかけが見出されていた。

さきにすでにみたように、上代の戸外休養が比較的手近いところに、野辺の春の摘草や秋草の観賞、山の端の花見、月見、紅葉、茸がりなどといった、人里に近く日常生活環境からそう隔絶されていないところで、十分満たすことができたということは、このような日本人の精神構造を通してみることによって、一層はっきり理解されるであろう。

このような日本固有ともいふべき精神構造が、近代になって、欧米と同じようなスポーツを主とする、本格的レクリエーションの時代に入ってもなお、休養行動の中に生きており、そこに日本的な戸外休養の特質を帯びさせていると考えられる点については、さらに稿を改めて後に述べようと思う。

ま と め

recreation の概念をやや拡張すると、森林休養は日本でも上代から存在し、森林や山を背景にした遊びは、弓矢による狩猟、鷹狩、溪流の魚釣、紅葉狩、登山などが行なわれたが、これとても量的には、野遊びにははるかに及ばず、また海辺・船遊びにも及ばなかったと推測される。

これらの森林休養が、その頃の生活の中にしめていたウエイト、および日本民族がこれに対して示した関心の強さを、万葉集の検討によって見出そうと筆者は試みた。また当時の日本人の自然感情の分析を通じて、森林観照の向けられた方向と傾きを、おぼろげながらつかみとろうとした。

註

1. recreation にふつう休養の語をあてているが、STODDARD も指摘するとおり、recreation は leisure よりもっと組織的で積極的なものであり、訓練による技能、計画と施設をしばしば要求するものであるから、recreation に休養の語をあてるのは適当とはいえないが、レクリエーションはわずらわしいし、ほかに適当な造語がされていないので、やむをえず以下に「休養」を recreation の意味に用いる。

U.S.A. Government : ORRRC Study Report 22.
P. 116, 1962.

2. U.S. Dep. Agr. : The Yearbook of Agriculture.
1949. pp. 533, 1949.

3. ORRRC : Outdoor Recreation for America, 1962.
4. U.S. Government : ORRRC Study Report 22 p. 4, 1962.
5. Webster's Third New International Dictionary, 1961.
6. The Columbia's Encyclopaedia 3rd Ed., 1963.
7. 川崎隆章：登山講座第1巻，1958，東京，p 17～21
8. von DROSTE=HUELSHOFF : Die Judenbuche, 1842. 邦訳 岩波文庫
9. HESSE, H. : Narziss und Goldmund, 1930. 邦訳 岩波文庫
10. THOREAU, H. D. : Walden, life in the woods, 1854. 邦訳 岩波文庫
11. HARDY, T. : Woodlanders, 1887.
12. たとえば、松をたたえる歌。佐々木信綱：新訓万葉集，上巻 巻6 通し番号 1042。橘をたたえる歌。巻6 1009。樹木が主題となっている謡曲「高砂」「竜田」「鉢木」など。樹がたたりをする話。謡曲「千引」
13. 長谷川如是閑：日本の性格，1938，岩波。p. 159～168.
14. 前出万葉集 巻6 926. の反歌
15. 同 上 巻7 1289.
16. 同 上 巻3 239. (柿本人麿の長歌)
- 同 上 巻3 478. (大伴家持長歌)
17. 同 上 巻6 1028. (坂上郎女の歌)
18. 同 上 巻6 926. (前出)
19. 同 上 巻3 239. (前出)
20. 同 上 巻3 478. (前出)
21. 同 上 巻17 4011. 大伴家持，放免せる鷹を思い，夢に見て感悦して作れる歌。
同 上 巻19 4154. 大伴家持白き大鷹を詠める歌。
22. 例えば，同上 巻5 853. 山上憶良，松浦河に遊ぶ序。
23. 例えば，同上 巻8 1591. 大伴家持の歌 もみじ葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか。そのほか，同上 巻8 1512, 1513, 1517, 1553, 1582, 1586, 巻10 2178～2218の40首
24. 同 上 巻8 1497.
25. 同 上 巻9 1759.
26. 同 上 巻9 1753.
27. 同 上 巻3 382.
28. 同 上 巻9 1757.
29. 同 上 巻8 1424.

30. 長谷川如是閑：前出 p. 159~168. 32. 大西克礼：万葉集の自然感情，1943，岩波，
31. 和辻哲郎：風土 1935，岩波。 p p. 175.

Summary

This paper is the first half of an study on the Japanese characteristics of forest recreation. In this issue it contains descriptions of ancient recreational patterns in woodlands, and some characteristics of forest recreation in the old Japanese livings. The second half of this study will appear in the next issue, containing patterns and characteristics of forest recreation in the modern Japan.

In the old Japanese livings the author found such forest recreations as huntings with bow and arrow, falconry, sport fishing in mountain streams, outing for viewing fall colour, mountaineering etc., among court officials and nobilities, which were less popular than the recreation in the open fields or at the seaside.

He tried, by searching into the *Mannyosyu*, to evaluate

- 1) a situation of the forest recreation in old livings of the Japanese,
- 2) their feeling toward woodlands, and
- 3) an amount of their interest, which they showed in forest recreation at that time.